



TITLE:

# 中国におけるキリスト教本色化運動：呉耀宗の思想の考察

AUTHOR(S):

徐, 亦猛

---

CITATION:

徐, 亦猛. 中国におけるキリスト教本色化運動：呉耀宗の思想の考察. アジア・キリスト教・多元性 2007, 5: 71-80

ISSUE DATE:

2007-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57702>

RIGHT:

## 中国におけるキリスト教本色化運動 —吳耀宗の思想の考察—

徐 亦猛

### 序

20世紀初頭の中国は、中国内部の内戦や西洋列強国からの侵略などの問題を抱え、社会情勢が非常に不安定であった。そのような厳しい社会情勢の下で、中国の国民は国家再建の道を模索していた。勿論中国社会の一員として、中国キリスト者もその問題に注目していた。1807年にモリソン(R. Morrison)が中国において宣教を始めて以来、キリスト教は中国において期待したほどの宣教効果が上がらなかった。さらに1922年4月、北京郊外の清華大学において「世界基督教学生同盟」大会が開かれ、その大会を契機として全国的規模の反キリスト教運動が起った。反キリスト教運動において、中国のキリスト者は自国を愛していないと非難されたが、この非難に対して、中国キリスト教知識人が立ち上がり、反キリスト教運動からの非難に対抗して、キリスト教本色化運動を起こしたのである。

当時中国教会の指導者とキリスト者知識人は「生命社」と「中華基督教文社」を設立し、キリスト教本色化運動を指導した。生命社のメンバーは、キリスト教信仰の重要性を証明するために、キリスト教が中国の国家再建に対して、具体的に貢献できる可能性を模索していたが、本論文では、当時の中国教会の最も代表的な指導者吳耀宗の思想を考察することにした。

山本澄子は、すでにその著作『中国キリスト教史研究』(1972年)において、吳耀宗のことを扱い、吳耀宗の代表著作『沒有人看過上帝』を通して、その思想を論じている。確かに、『沒有人看過上帝』は1943年に完成した吳耀宗の思想を表す代表的著作であるが、それは吳耀宗の神学思想の一部にすぎない。1943年というのは、ちょうど吳耀宗の神学思想の過度時期と言える。このような代表著作に限定して、吳耀宗の全体の思想を論じるには限度がある。さらに現代中国の学者の殆どは特定の政治的な立場にたって、吳耀宗思想の進歩的な部分を評価している。<sup>(1)</sup> 本論文では、吳耀宗の生涯全体を通して、その思想の変遷を明らかにしたい。

---

(1) 『吳耀宗生平与思想研討』、中国基督教两会出版、1999年、『天風』、中国基督教两会出版、2004年12月号、丁光訓、羅冠宗などは吳耀宗の思想が中国教会にとって、最も困難な時代の救い主であり、中国教会を新たな時代(共產主義時代)へ導く先駆者であると評価した。

## 1. 呉耀宗の生涯と初期の信仰内容

中国キリスト教の歴史において、呉耀宗は非常に注目すべき人物である。彼は中国キリスト教青年会の指導者であり、中国キリスト教三自愛国運動の提唱者でもある。1893年11月4日呉耀宗は中国の広東省順徳の非キリスト教徒家庭に生まれた。幼少期から賢くて、勉強好きであったので、11歳の時、両親は、彼を一人のユダヤ人が開いた「育才」という学校へ入学させた。<sup>(2)</sup> 15歳の時、北京税務専科学堂へ進学し、1913年卒業後広東省広州・牛莊の税関へ就職する内定をもらった。広州・牛莊の税関へ赴任する前、ちょうどモット (John R. Mott) <sup>(3)</sup> が北京キリスト教青年会において講演を行った。呉耀宗はモットの講演を聞き、キリスト教青年会に対して非常に深い印象をもった。1916年北京税関総税務司署へ転勤となったが、北京に戻った後、友人の紹介によって、キリスト教青年会の会員となった。1917年の春、呉耀宗は北京キリスト教青年会の米国友人宅で偶然に『新約聖書・マタイ福音書』において、イエスの山上垂訓を読んだ。「自分の人生の希望と信仰を見つけた」と語られているように、<sup>(4)</sup> 彼はイエスの言葉に深く感銘し、1918年の夏、北京キリスト教の公理会<sup>(5)</sup> において洗礼を受けた。

受洗後、呉耀宗はますます敬虔にキリスト教を信じるようになった。自分の日記において、「以前あった様々な悩み、恐れ、悲観がすべてなくなって、今は将来に対して希望と喜びが一杯である。イエス・キリストこそ、暗闇の光である」<sup>(6)</sup> と語っている。1920年11月税関の仕事を辞職し、北京キリスト教青年会学生幹事に就任した。これ以後、長年にわたりキリスト教青年会の事業に貢献した。

キリスト者になった初期の呉耀宗は純粋な気持ちでキリスト教信仰を解釈したが、ここで当時の彼の信仰内容を簡潔に要約しておきたい。

彼にとって、キリスト教の神は万物の造り主であり、はじめからその神は存在することを確信した。宇宙万物は多くて、数えられないし、その美しさは言葉で表すことができない。しかし、万物の生と死において、すべて規則がある。全知全能の方だけが、それを支配できる。この全知全能の方はキリスト教の神である。キリスト教の神は大きな能力を持ち、人間の行いについて、監察している。それゆえ、人間は善を行うべきである。善を行うなら、神は喜び、人間を助ける。もし悪を行うなら、神は怒って、人間を責めるのである。その意味で、キリスト教は人間を善に導いていく宗教である。<sup>(7)</sup>

(2) 沈徳溶『呉耀宗小傳』、中国基督教三自愛国運動委員会、1989年、1頁。

(3) 1910年にはエジンバラで世界宣教会議 (World Christian Conference) が開かれ、全教派の一致協力に関する具体案が討議された。まず各国に諸教派協力のための機関を作ることが決議され、そのための委員会

”The Continuation Committee of the Edinburgh Conference” がつくられ、John R. Mott がその委員長となった。

(4) 山本澄子『中国キリスト教史研究』、近代中国研究委員会、1972年、272頁。

(5) 公理会は American Board of Commissioners for Foreign Missions である。

(6) 沈、前掲書、7頁。

(7) 卓新平『中国基督教基礎知識』、宗教文化出版社、2005年、295頁。

吳耀宗も彼の先輩である吳雷川や趙紫宸と同様に、中国伝統思想によってキリスト教思想を解釈するよう努力した。吳耀宗もキリスト教の愛は儒教の仁と同一であると見なしている。すなわち、「人が生活し、社会が存在することのできるのは、みな人と人とが相互に必ず遵守すべき道理による。この道理は、儒教が仁と称し、イエスが愛と言っているものである。人の生命は有限であり、社会・民族・国家の生命も有限である。しかし、愛と仁の道理は永存する」。<sup>(8)</sup>そして、神を信仰する人は、自己の行為が神の「旨意」に合っているとの確信を得たときには何事をもなし得ると、吳耀宗は次のように言っている。「彼が問題とすることは自己のなすところが真理に合っているか否かということである。もし合っているということであれば、彼はそれが神の『旨意』に合っていて、終には必ず成功し得るということをし、はっきりと知るのであり、必ず平穩な気持ちでいられる。所謂『順天者存、逆天者亡』ということである。イエスが坦然として恐れなく十字架にかかったのもこの意味なのである」<sup>(9)</sup>と。

## 2. 反キリスト教運動からの影響

1919年に5・4運動が起こり、さらに1922年には反キリスト教運動が始まり、キリスト教は「帝国主義の走狗」であり、「人民の鴉片」とであると非難された。<sup>(10)</sup>その頃の吳耀宗は、信仰的に動揺し、精神的にかなり苦悶した。彼は自分の著作『沒有人看過上帝』において、その時期の自分の信仰について、「私がキリスト教を信仰するようになってから間もなく、国内に激烈な反宗教運動が起こった。『帝国主義の走狗』という罪名を、私は気にしなかった。なぜなら、私自身は帝国主義の走狗ではないと信じているし、他の多くのキリスト者も外国宣教師も、やはり帝国主義の走狗ではないことが明らかだからである。しかし『人民の鴉片』という言葉は、私の頭の中で旋廻してはなれなかった。キリスト教は迷信であろうか。反キリスト教の立場は、科学思想に基づくもの、唯物論に基づくもの、西洋哲学あるいは中国文化に基づくものなど様々であった。これらの宗教に反対する理論が迫ってきて、私は自身の宗教信仰に最も厳格な検討を加えざるを得なくなった。私はこれらの問題に最も集中し、かなりの研究もしたけれども、満足な回答を得るには至らなかった。本当に苦悶した」<sup>(11)</sup>と述べている。

その後、吳耀宗は長い間この問題の解決を模索し続けた。1922年世界キリスト教学生同盟が北京で第11回大会を開いた後、吳耀宗は積極的にキリスト教学生運動を推進した。1924年から1927年までの間、吳は北京キリスト教青年会の推薦で、ニューヨークのユニオン神学校とコロンビア大学で神学・哲学・宗教学について研究し、コロンビア大学から哲学修士号を獲得した。<sup>(12)</sup>1927年帰国後、彼は中華キリスト教青年会(YMCA)全国協会の校会組主任として、全国各地で学生

(8) 山本、前掲書、284頁。

(9) 同上、284頁。

(10) 同上、272頁。

(11) 同上、272-273頁参照。

(12) 同上、270頁。

伝道を行った。30年代初期、同協会の出版組主任となり、中国唯愛社<sup>(13)</sup>の主席を兼任し、中国にいる宣教師(S.Lautenschlager)と共に青年学生向けの『唯愛』という雑誌の出版活動を始めた。彼によれば、キリスト教の基本は愛であり、愛は人類生活において最高の原則である。愛の精神を人に充満させ、社会の各団体の相互協力することによってこそ、社会の改造や新制度を創立することができる。ちょうどその時期に、日本軍の中国に対する侵略戦争がはじまったが、キリスト教が愛の宗教と深く信じてきた呉耀宗は、すべての戦争と暴力に反対し、平和を用いて戦争に抵抗することを積極的に提唱した。つまり非協力という方法で日本の侵略へ抵抗した。呉にとって、非協力と無抵抗とは全く異なる方法である。無抵抗は消極的な方法で、非協力は積極的な抵抗である。すなわち、日本の製品や品物に対する不買運動や日本への非協力によって、日本軍が中国から撤退することを目指そうとしたのである。武力による抵抗には、呉は明らかに反対の態度を取った。<sup>(14)</sup> どんな戦争であっても、永遠に問題を解決することができない。善は必ず悪に打ち勝つ、恨みや報復からの武力すべてに反対する、これが彼の信念であった。キリスト教の愛の実現が愛の社会を可能にするのであって、それが中国社会にとって唯一進むべき道なのである。

<sup>(15)</sup>

20世紀前半、日本の神学者賀川豊彦のキリスト教社会運動論や世界平和論などはアジアのキリスト教会にかなり影響を及ぼした。賀川豊彦にとって、神の国というのは神が正義と愛と恵みとをもって支配する世界、すなわちキリストの愛が支配する世界にはほかならない。その世界が弱者に力を与え、悲しんでいる者に慰めを与え、また苦しんでいる者に救いを与え、罪ある者に罪のゆるしを与え、貧しい者、病気の者を助けて下さるという神の愛が支配する恩恵の世界である。賀川豊彦の信仰の世界は、愛が支配する世界を意味し、これはイエスが示された神の国である。それゆえ賀川豊彦においては、信仰によって隣人愛をもって、社会運動、労働運動、農民運動に尽くしながら、世界平和のために努力していこうとする魂が実際生活の中に滲み出ているのである。<sup>(16)</sup> このような賀川豊彦の思想が当時中国の本色化運動を指導した雑誌『真理与生命』において連続で紹介されたのである。さらに賀川は1920年代頻繁に中国へ渡り、スラム伝道を行うことによって、当時の中国の指導者や教会の指導者や知識人などから厚い信頼を得た。<sup>(17)</sup> さらに上海日本人YMCAの招きによって、賀川は夏期講座を開き、中国で大きな反響を呼んだ。<sup>(18)</sup> 呉耀宗が本色化運動の参加者として、中国のYMCAの指導者として、賀川豊彦の文章と思想をかなり熟知し、そこから賀川 of 思想の影響を受けていたことは十分に推測できるであろう。

(13) 唯愛社は The Fellowship of Reconciliation である。これは当時北京にいる宣教師と中国人キリスト者が合同で創った平和団体である。

(14) 沈、前掲書、28頁。

(15) 同上、22頁。

(16) 黒田四郎『私の賀川豊彦の研究』、キリスト新聞社、1983年、296－305頁。

(17) 浜田直也「孫文と賀川豊彦—1920年の上海での会談をめぐって」『孫文研究』2001年7月、19頁。

(18) 民国日報、中華民國十一年7月14日

ところが、呉耀宗の提起した日本に対する不買・非協力運動は、参加者の人数が少なかったため、あまり大きな行動には至らなかった。さらに1932年日中間の情勢がさらに緊迫するようになると、呉耀宗は非協力による日本への対抗思想に対して、動揺し始めて、さらに思想変化が生じた。彼はキリスト教が愛であり、戦争反対という考えについて、新たな解釈を行った。彼は1932年2月に『唯愛』の第四期において、「日本が中国への侵略を展開することに対して、私の感情は戦争支持の方々と同じになっている。日本に対する武力抵抗の傾向が避けられない。それは中国人にとって、最も受け入れられる方法であることを私は認める。私はキリスト教が愛であるという信念を変えていないが、武力による日本への抵抗の道に進む方々に敬意と同情をささげたい。こういう大事な時、私たちキリスト者の使命の重大さについて、さらに覚えるべきである。わたしたちキリスト者は武力による抵抗に参加しないが、自分の些細な力で社会に貢献しなければならない。それは積極的な愛の福音の宣教と実行である。しかし、私たちキリスト者は愛を大切にすゆえに、人が人を搾取する制度すべてを廃止する努力をしなければならない。もし私たちはただ見るだけで、行動を示さないならば、私たちが訴える愛は空しい。キリスト者が訴える愛は非暴力的な革命である。共産主義の革命は暴力によるもので、私たちの革命と目的が同じであるが、手段が異なるのである」と述べた。<sup>(19)</sup>そして教会については、「今の教会にとって、主要な任務は社会改革である。現在の中国社会には色々な問題が存在しているため、国力が弱いのである。教会は愛の社会を提唱しているのだから、社会の問題を無視するわけには行かない。社会の改革はいわゆるキリスト教が提起している愛の社会の建設である。中国は今存亡の時期に直面しているが、合理的で愛ある社会を建設するのが中国社会にとって歩むべき道である。キリスト教の愛中心の教義は新しい社会制度を建設する基礎であり、中国社会の光と希望である」と論じた。<sup>(20)</sup>

以上の彼の文章を通して、武力による日本への抵抗について、呉耀宗の態度が反対から同情と援助へと変化したことがわかる。しかし、呉は自分の戦争への不参加の信念を堅守した。呉耀宗がキリスト教から発見した愛の社会を建設するという社会改革案は、国家再建などの問題に強い関心を持っていた中国知識人の国家意識と結びつき得るものであり、当時の中国社会の要求に応答できる唯一の道だったのである。

### 3. 後期の呉耀宗の思想

1920年代以来、欧米の自由主義神学や社会福音思想は、中国の教会やキリスト教青年会に大きな影響を与えた。多くの教会の知識人や教会の指導者はこの神学思想を信奉した。中国の自由主義神学者はキリスト教が個人の魂を救うと同時に、この社会も救うことを信じ、さらにキリスト者は社会問題に関心をもつだけでなく、社会の改造のために貢献すると強調した。キリスト教の中国への貢献は、単なる福音の宣教だけではなく、あらゆる面において中国の民族の自助運動を促進することである。中国における社会運動の政治化、急進化によって、彼等は社会の需要

(19) 沈、前掲書、28頁。

(20) 沈徳溶『在三自工作五十年』、中国基督教三自愛国運動委員会出版、2000年、155頁。



からキリスト教の福音を新たに解釈したゆえ、福音は当時の中国の救国方法との結びつきによって、中国民衆を受け入れやすいようにした。呉耀宗の後期思想において、こういう傾向が強く現われた。1947年呉耀宗は、過去の30年間に於いて、自分の思想に二回大きな変化があると顧みている。第一回はキリスト教を受け入れた時期で、第二回は反宗教的社会科学を受け入れた時期であった。言い換えれば、呉は西洋の愛を中心とするキリスト教に影響されたキリスト者から、共産主義的キリスト者への道を辿った。以前、呉は共産主義に対して強い不信感と反感を持っていたが、1930年代後半に入ると、日本からの侵略戦争が拡大し、国民党は消極的な抗日運動を行った。呉は国民党の統治下における社会的な罪惡、不正の社会状況に対して、非常に敏感で不満を感じたゆえに、マルクス主義・社会主義・共産主義を見直して、それを用いて中国社会問題を分析するようになった。1940年代後半以後、彼は中国の社会問題がすべて資本主義制度からの原因によると認識するに至り、今まで信じてきたキリスト教は愛であるという信念から、共産主義や社会革命、いわゆる武力による社会革命を全面的に支持し、キリスト者に共産党に協力するように呼びかけた。その時、彼はキリスト教について、「キリスト教は人生の宗教であるのだから、人間の生活の様々な面において表わされるべきである。しかし、宗教は生活、社会、国家、国際問題などと分離することができない。教会もただの避難所になるべきではないし、キリスト者も社会に対して無関心であってはならない。キリスト者はキリスト教を受けるだけでなく、もっとも重要なのはキリスト者の行い、すなわち人々のために犠牲になるということなのである。積極的にこの世の社会革命に参加し、共産主義から提唱された階級闘争によって、健全な新社会を建設する」と主張した。

急激な社会情勢の変化によって、呉耀宗は独特のキリスト教神観を形成した。その神観は1943年出版した彼の神学著作『沒有人看過上帝』において知ることができる。呉耀宗は、キリスト教の神について、「私たちは神の本体を見ることが出来ない。ただ人間は宇宙を通して、神の『作為』を知ることのみができる。宇宙の万物は神ではないが、神は万物の中にいる。神は万事万物の中の真理である。もちろん、神は単なる真理ではないが、しかし真理以外に神について私たちは認識する方法がないのである」<sup>(21)</sup>と語った。呉耀宗は「内在」と「超越」という表現を用いて、自分の神観を述べた。「神は内在的なものと同時に、超越的な存在でもある。内在の神は宇宙の万物の中から見出す事ができ、またこれらの事実の真理の中から見出す事ができる。しかし超越の神は、宗教的に言えば、一つの信仰であり、哲学的に言えば、一つの仮定である。私たちの神認識に最も重要な根源はイエス・キリストである。彼は神を『顕示』した、イエス・キリストは『言葉は肉体となり』と表現されている通りである。私たちはキリストをみれば、すなわち神を見たのである」<sup>(22)</sup>と語った。さらに、呉耀宗は伝統的なキリスト教神観の説明のしかたとは反対の形を示す。すなわち従来のキリスト教の信仰過程は、客観的な世界を離れて主観的な世界から出発し、祈祷や冥想によって直接に神認識に到達することのできる一つの独立した存在である。し

(21) 呉、『沒有人看過上帝』、青年協會書局、1943年、113頁。

(22) 同上、115頁。

かし、吳耀宗は「私たちが明らかにしてきた神観は却って、下より上に至り、外より内に至り、可知より未知に至るものである。目で見ることのできるもの、客観的に証明し得るものを出発点として、それを土台に見えないものを理解してゆく」<sup>(23)</sup>と強調した。

吳耀宗はこの独自のキリスト教の神観に基づいて、キリスト教があらゆる面において共産主義と協調すべきであると考えた。彼にとって、「キリスト教の信仰は唯物論と矛盾しない。なぜなら、唯物論と同じように、キリスト教信仰も宇宙万物の客観的存在であり、科学的方法で体験できるのである。それで人間は神に対する信仰を持つと同時に唯物論も信じられる」<sup>(24)</sup>のである。同時に吳にとって、両者の社会理想も一致していた。彼は「キリスト教の目的は天国の降臨であるが、共産主義の目的は階級のない自由平等の社会の建設である。つまり、現状を破って、新しい理想的社会を建設するのは明らかに両者の目標である」<sup>(25)</sup>と認識した。キリスト教も共産主義も階級闘争によって民衆を苦難から解放する。イエスが提唱したのは民衆の苦難を解放する社会福音である。吳から見れば、キリスト教も共産主義も共に階級闘争を主張しているのである。<sup>(26)</sup>吳はキリスト教と共産主義運動や唯物論は衝突しないということ、相互に補充することができる結論した。この結論は、彼がキリスト教の基本信仰、社会問題、唯物論、社会主義思想を研究した結果到達したものである。彼は相対と絶対という言葉を用いて、キリスト教と共産運動や唯物論について、説明した。つまり、キリスト教の現実の軽視という弱点は共産主義によって補われる一方、共産主義の相対なるものを絶対と考える危険性はキリスト教によって補われるのである。<sup>(27)</sup>さらに吳耀宗は、キリスト教とマルクス主義がただ相互に補充しあって並立してゆくというのではなく、キリスト教がマルクス主義を包括することは可能であって、将来、社会革命完成後の新しい時代に、普遍的な新しい世界観・価値観の根幹となるものが、キリスト教であると考えた。この結論は、吳耀宗の長年探求し思索した思想の結晶である。<sup>(28)</sup>

しかし1948年以後、吳耀宗の思想は一層激しさを増した。1948年彼は『天風』週刊において「キリスト教的時代悲劇」という論述を発表した。その論述の中、吳は「世界的な革命が私たちの前に展開している。資本主義はもうこの時代に適応しない。宗教革命と産業革命は社会発展の産物である。宗教革命によってプロテスタントを形成されたが、産業革命によって資本主義が生まれた。そのため、プロテスタントと資本主義は相互依存する。現在キリスト教時代の悲劇的な主役はアメリカである。第二次世界大戦後、アメリカは資本主義の王国になり、アメリカが指導する新十字軍は世界を征服しようと思っている。西洋のキリスト教の経済の基礎は資本主義社会の上流階層からでたもので、キリスト教は無意識に社会変革の障害になり、保守勢力の代弁者になった。中国のキリスト教の状況は非常に悲しい。なぜなら、現在中国の教会は西洋教会の付属品で

(23) 同上、15-16頁。

(24) 吳耀宗「基督教与共産主義」、『近代華人神学文献』、中国神学研究院、1986年、597頁。

(25) 同上、600-602頁。

(26) 同上、604頁。

(27) 吳、『没有人看见過上帝』、98頁。

(28) 同上、30頁。



あり、中国に属する教会、神学、儀式はまだ形成できなかった。中国の教会は経済的に西洋教会に頼っているため、信仰や思想も全部西洋教会の真似をする。しかし、今のキリスト教はすでに帝国主義思想、文化侵略の道具、社会変革の障害になったのであるから、私たちがこの西洋のキリスト教の思想路線を固執すれば、中国教会の未来はない。中国教会は必ず西洋教会のコントロールから抜け出し、自主独立の教会になるべきである。私たちの信仰が迷信的、時代遅れで、民衆の利益に背くものであるならば、私たちのすべては歴史の審判を受けなければならない。その時、私たちは自分が義のために迫害を受ける者、あるいはイエスの十字架を負う者であると思うなら、本当に悲しいことである」<sup>(29)</sup>と強調した。

以上述べた呉耀宗の後期の思想は、後の彼（1949年以降）が提起しそして指導した「中国キリスト教三自愛国運動」のために道を開いた。1949年中華人民共和国が成立以後、中国の社会において大きな変化が起きた。共産党が社会の主導権を握ったのである。その中で、すべての機構や個人はこの権力に従わなければならない。「洋教」と呼ばれたキリスト教も例外ではない。1949年以前、中国のキリスト教会は絶えず本色化に向かって努力してきたが、大きな成果が上がらなかった。自立できたのは、わずかな一部の教会であり、多くの教会は経済面において西洋の教会に依存していた。自治、自養、自伝という三自が中国の教会にとって長年の目標であり、中国人はキリスト教を依然として「洋教」と認識していた。1949年以前に共産党政府は長年続いていた中国の半植民地的半封建的な社会状況を終結させることを目指した。西洋教会と親密な関係にある中国キリスト教会も批判を免れなかった。西洋教会との関係を完全に絶ち、三自を実現することが、中国キリスト教会にとって社会変化に適応して、生き延びる唯一の道であった。呉耀宗はこうした認識に立って、教会内の一部の共産主義の擁護者と共に政府の人民政治協商会議に参加すると同時に、三自愛国運動を指導した。

1950年5月、呉耀宗をはじめ人民政治協商会議代表者を含むキリスト教指導団が、北京を訪問して「中国基督教会宣言」草案を提示して、周恩来首相の意見を求めた。その後この草案をキリスト教指導者多数に提示したところ多くの批判が寄せられたが、それに基づいて訂正した草案を再び周恩来に提出し、認可を得て同年7月に公表した。<sup>(30)</sup>これに対して、呉耀宗は「人民民主専政下の基督教」において、キリスト教が新しい社会に対する適応性を示した。彼は「中国のキリスト教が新しい局面に迎えた。私たちキリスト者は新しい認識や覚悟や主張などを持つべきである。古い袋に新しい酒を入れないように、中国のキリスト教も新しく変革しなければならない。今の時代は民衆の時代であり、解放の時代でもある。民衆は封建勢力や、帝国主義、資本主義の圧迫から解放されるのがこの時代の特徴である。キリスト教の「愛」と今の時代の「解放」は同じ意味である。過去において、西洋帝国主義列強は宗教を侵略の道具として利用して、中国を支配してきた。中国の教会はちょうど西洋教会のコントロールのもとにいたから、中国教会も帝国主義との関係があることは否定できない。中国の教会が西洋教会の支配から退け出すのは簡

(29) 沈、『呉耀宗小伝』、44－45頁。

(30) 山本、前掲書、186－189頁。

単ではない。それで、私たちキリスト者もこの時代の流れに積極的に参与し、時代の使命を全うしなければならない。かつて、イエスは『地の塩、世の光になれ』という戒めを与えて下さった。それは、私たちが新しい世界を創造するのではなく、今この世において人を救うために働くという意味である。中国の未来は明るいが、中国の教会もこの時代において積極的な態度を取り、共産政府に極力し、西洋教会との関連ない自立の教会を建てれば、中国の教会の未来も明るいであろう。」<sup>(31)</sup>と強調した。

吳耀宗が理解したキリスト教は、社会革命と協力し合い、新しい社会を建設する理論基礎となるものであった。中国を外国の侵略から解放するためには、このような中国社会の革命が必要だったのである。こうして、吳耀宗の思想はキリスト教が愛であるという基本教義から出発し、社会改革を経て、共産主義、社会革命に到達したのである。

## 結論

吳耀宗はキリスト教が革命の宗教であると考え、新しい社会を建設するために、キリスト教も共産主義や社会革命に参加しなければならないと論じた。彼の思想は、具体的な社会の現実の研究に焦点を合わせたものなのである。これは本色化から社会再建までの過程であり、また同時にそれは中国キリスト者による民族主義への応答でもあった。

吳耀宗の思想の結晶とも言える抵抗革命による社会革命と共産主義の融合は、時代的要請によって形成されたものであって、恐らく中国の社会環境と政治情勢の変化から影響されたものといえる。彼の思想は、5・4新文化運動以来、中国の社会運動が政治化するという動向を、教会内部において反映したものである。つまり、その思想は当時の社会政治の動向と一致している。こうして、1949年以後、吳耀宗は共産政権の下に中国教会の改革を指導する任務を担うことになった。彼の思想は三自愛国運動神学体系の主要な部分となり、三自愛国教会の社会政治的な態度を左右した。神は現在の社会主義において存在し、社会制度および共産党の支配は神のみ旨に適うという吳耀宗の神学思想は、教会が積極的に社会主義建設に参与する神学的な根拠となった。しかし、吳耀宗においては、キリスト教の福音と特定の社会政治運動とを同一視することによって、キリスト教と他の特定の社会政治運動との間の境がなくなり、またキリスト教の福音は当時社会的に流行していた思想と結びつけられ、キリスト教の価値が中国人のアイデンティティに適応できるかどうか、また民族復興に貢献できるかどうかという観点からのみ決定しているように見える。そこには、キリスト教の独自性がなくなるという危険性が存在しているのではないだろうか。さらにキリスト教とマルクス主義・共産主義との関係についての吳耀宗の見解は、「対決」よりも包括による「総合」である。これは吳耀宗がマルクス主義・共産主義に対して特別な政治的配慮のもとに形成したキリスト教思想の特徴と言えるのではないだろうか。

(Xu Yi Meng 関西学院大学大学院神学研究科博士後期課程)

(31) 沈、『吳耀宗小伝』、48頁

アジア・キリスト教・多元性